

# 高等学校における CEFR 活用について

中村隆道

## 1 はじめに

平成 21 年発出の高等学校の現行学習指導要領において、『授業は英語で行うことを基本とする』という文言が加わり、世間の耳目を集めたことは記憶に新しい。当初はこの文言の表層的な部分のみが焦点化され、その本質的な目的についての議論が少なかったように思われるが、以下に示すように「生徒に英語の運用場面をできるだけ創出する」ことを目的としていることは今では広く認知されている。

英語に関する各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。

(文部科学省 高等学校学習指導要領解説：115-116)

これまでの解説・訳読型の授業からいわゆる「四技能」を統合した授業への転換を加速させる方向性が明確に打ち出されたわけである。しかしながら実際の教育現場では、その転換は思うように進んでこなかったのが現状であり、具体的な方策や指標を統一的に共有してはこなかったように思われる。そういった状況で、現行学習指導要領発出以後、四技能を測る尺度として広く活用され始めたのが、「Common European Framework of Reference for Languages (ヨーロッパ言語共通参照枠)」、いわゆる「CEFR」である。「CEFR」は、言語機能に基づいた「‘Can Do’ statements」によって、その言語を使って「具体的に何をすることができるのか」が詳細に示されている。こういった言語技能のとらえ方が、ヨーロッパを中心に世界的に広がりを見せているのと同時に、閉塞感のある日本の高等学校の英語教育の現場でも少しずつ浸透し始めている。

本稿では、高等学校の英語教育における「CFER」活用の拡大の状況とその必要性、そして「CEFR」をベースとする外部検定、「ケンブリッジ英検」を学校に導入した経緯と結果について実践報告を行う。

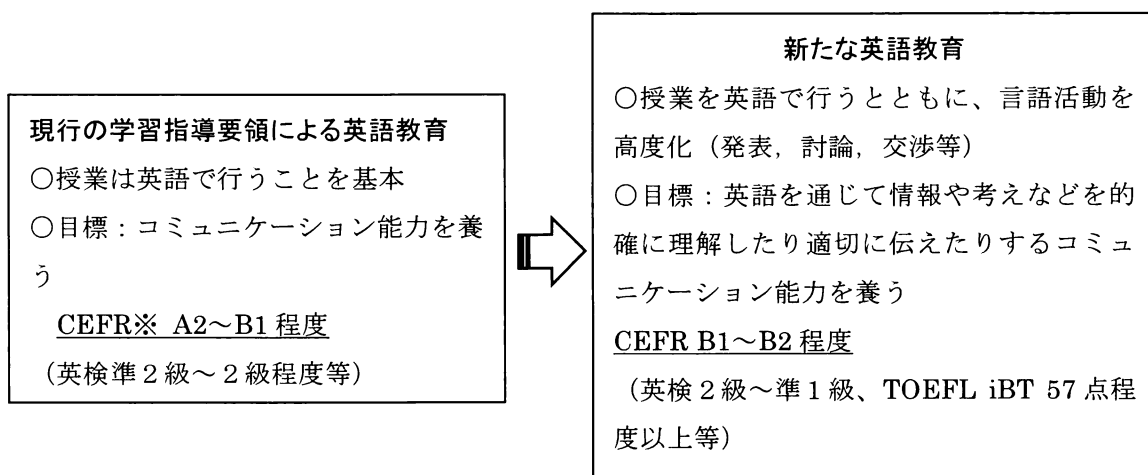
## 2 「CEFR」活用の拡大

英語力をグローバル・スケールで測る有効な指標として、「CEFR」はさまざまな語学検定試験や語学メディアでも活用され、その活用は拡大の一途をたどっている。一例としては、2012 年度に NHK のすべての英語番組が CEFR を活用し、レベル提示を行うようになったことが挙げられる。

NHK 英語テキストは国際標準の CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)に対応したレベル分けをしています。基準となるのは、「何ができるか(Can-do)」というコミュニケーション能力。目的に応じて講座を選ぶことができます。

(NHK 出版 ホームページ)

また、文部科学省による英語教育改革の諸施策においても広範に活用されている。平成 25 年 12 月に公表された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、現行指導要領よりもさらに高い目標を掲げ、具体的に目標値として CEFR のスケールを示している。



※ 下線は筆者による

(文部科学省 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」)

この実施計画に伴い、フィージビリティ調査として実施された平成27年度「英語教育改善のための英語力調査事業 (高等学校)」においては、CEFR、厳密にはCEFR-Jの概念を活用した分析方法が用いられている。

本調査におけるCEFRレベルの算出は、昨年度調査と同様、「生徒質問紙」の掲載の「英語CAN-DOアンケート」への回答結果をもとに分析した。「英語CAN-DOアンケート」の各アンケート項目は、文部科学省・科学研究費助成事業のCEFR-J研究開発チーム(代表:投野由紀夫)の研究成果を用いた。CEFRの読むこと、聞くこと、書くこと、話すこと(発表)、話すこと(やりとり)の各A1～B2レベルに対応したCAN-DO記述をベースにしつつ、更にA1レベルを3段階に、またA2～B2レベルを各2段階に細分化した。

(文部科学省 「平成27年度英語教育改善のための英語力調査事業報告」)

また、同実施計画に基づき、文部科学省より平成27年6月に発表された「生徒の英語力向上推進プラン」においては、生徒の英語力向上の指標としてCEFRを用いることを明記

している。現状の課題として、高校3年生はA1の上位からA2の下位レベルに留まっていることであり、将来的な目標として「高等学校卒業段階：英検準2級程度～2級程度以上（A2～B1）を達成した中高校生の割合50%」としている。

上述のように、英語力の指標としてCEFRが確実に活用されており、現場の教員間においてもその認識が高まりつつある。ただ依然として、それが実際の現場での指導に結びついていないという現状が大きな課題である。

### 3 大学入試における外部検定試験の活用

英語力を測るほとんどの外部検定で、CEFRの枠組みが活用されているのは周知のことである。昨今の大学入試においては、こういった外部検定の活用が急速に進んでいる。平成25年5月に教育再生実行会議第三次提言によって発表された「これからの大学教育等の在り方について」の中で、大学入試や卒業認定について外部検定を活用することが求められたことが大きな要因の一つである。

大学は、大学入試や卒業認定におけるTOEFL等の外部検定試験の活用、英語による教育プログラム実施等の取組を進め、学生に実践的英語力を習得させ、海外留学に結び付ける。外部検定試験については、大学や学生の多様性を踏まえて活用するものとする。

（教育再生実行会議第三次提言）

また、文部科学省が毎年大学に通知する「大学入学者選抜実施要項」においても、語学の資格・検定試験については、四技能を測ることのできる資格・検定試験を推奨している。

入学志願者の能力・適性や学習の成果、活動歴等を多角的かつ客観的に評価する観点から、例えば、以下のとおり、学部等の特性及び必要に応じ信頼性の高い資格・検定試験等の活用を図ることが望ましい。

① 入学志願者の外国語におけるコミュニケーション能力を適切に評価する観点から、「英語力評価及び入学者選抜における資格・検定試験の活用促進について」（平成27年3月31日付け26文科初第1495号文部科学省初等中等教育局長・文部科学省高等教育局長通知）を踏まえ、実用英語技能検定（英検）やTOEFL等、「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能を測ることのできる資格・検定試験等の結果を活用する。

（文部科学省 「平成29年度 大学入学者選抜実施要項」）

大学入試における外部検定活用が奨励されて以来、検定を活用する大学は着実に増えており、現状で43.0%に上る。

以下の表は検定を活用している大学の状況を示している。純計は検定を活用している大

学の数を示しており、大学によっては推薦入試やAO入試などにおいて、複線的に活用しているケースもある。

	純計	推薦	AO	一般
国立	35	18	11	9
	(43.2%)	(23.5%)	(13.6%)	(11.1%)
公立	21	17	8	1
	(26.3%)	(21.3%)	(10.0%)	(1.3%)
私立	243	168	149	34
	(45.5%)	(31.5%)	(27.9%)	(6.4%)
計	299	203	168	44
	(43.0%)	(29.2%)	(24.2%)	(6.3%)

下段の( )は、国立81校、公立80校、私立534校、計695校に対する割合

※回答時点における導入予定校も含む。

(特定非営利法人全国検定振興機構 「民間の英語資格・検定試験の大学入学者選抜における活用実態に関する調査研究事業調査結果報告書」)

ただし、国立大学の一般入試では活用がまだ9校のみであり、全体的にも推薦入試、AO入試での活用が主流である。現時点では一般的な入試方法と言える段階ではない。一方で、こういった外部検定のスコアを出願要件としていたり（東京海洋大学など）、推薦入試で語学力の指標としていたり（東京大学など）、外部検定は高校生たちにとっては少しずつ存在感のあるものとなっている。こういった状況において、指導の現場では少なからず混乱が出ている印象がある。というのも、大学入試において活用される外部検定試験は四技能の能力を問う問題であるため、多くの生徒にとっては特別な対策を必要とすると考えることが多く、英語力が相対的に高いと思われる生徒でも必ずしも積極的に受検するわけではない。また、教員側もそういった外部検定についての理解が不足しているという点と、また授業以外での付加的な指導を行うことは時間的に難しいと考えている点で、外部検定を積極的に生徒に奨励する雰囲気であるとは必ずしも言えない。

つまり残念ながら、外部検定で問われる四技能と、学校で学んでいる、あるいは指導している内容が同一だという意識が双方に希薄なのである。現行学習指導要領で示されている「四技能を総合的に育成する指導」が確実に実現されていれば、外部検定への取り組みや意識も今とはだいぶ違ったものになっているはずである。

#### 4 英語力の校内定点観測の課題

多くの高等学校で、ある教科（科目）について何らかの指標をもとに学年間の学力の経年比較、いわゆる「定点観測」を行っている。その分析をもとに、指導の改善を行っている

くことになる。定点観測自体は、指導の振り返りの1つの材料として有効に活用されている部分もあるが、特に英語については課題が多い。

1でも述べたように、昨今の英語力とは四技能を統合した総合的な英語運用力を示すものであり、その到達度もCEFRベースで示されることが多い。ところが、定点観測で用いられるデータは多くの場合、予備校等が製作した大学入試を想定した模擬試験である。模擬試験の結果をもとに、指導を振り返り、授業改善を考えていかざるを得ない状況である。

模擬試験でも、「読むこと」、「書くこと」、「聞くこと」の三技能の能力を問う形式となっはいるが、CEFRのCAN-DOリストにあるようなタスクを行える能力を問うというよりは、設問の要求に答えるために情報を処理する能力があるかを問う側面が大きい。端的に言えば、英語の授業において充実した言語活動をとおして指導を行ったとしても、必ずしも模擬試験等での成果に直結しない部分がある。しかしその結果が指導の振り返りの機会となってしまうので、授業改善についての本質的な議論をするのが難しい状況である。

したがって、四技能を統合したグローバル・スケールに基づいて英語力を測り、その結果を授業改善に反映させていくには、その種の検定を受けることが最良ということになる。こういった点から、校内的にも生徒の四技能をCEFRのようなグローバル・スケールで測定する検定の導入が議論されることとなった。

## 5 四技能検定導入へのハードル

前項で述べたように、CEFRのようなグローバル・スケールの活用を必須と考え、同時にそれに基づいて英語力を測定する検定の導入が議論され始めていたが、導入には2つの問題が存在していた。1つは「検定料」である。四技能を測る検定には、国内のものであれば比較的廉価なものもあるが、よりグローバルな指標で英語力を測ることが望ましいことと、将来的に海外での進学や就職ということを視野に入れた場合、どうしても外国のテスト・メーカーによる検定が必要となるが、そういった検定は検定料がかなり高額であり、在籍生徒全員を対象とすることは難しい。2点目は、検定会場が校外であることが前提となるため、やはり全員受検を促すのは難しくなることである。「検定料」と「校外受検」というハードルをクリアすることが最大の問題であった。

こういった状況下で、大きな変化となったのが、東京都による「検定料補助」の施策である。筆者の高校は東京都教育委員会より「東京グローバル10」に指定されており、さまざまな支援を受けている。平成28年度より「外部検定試験の受験支援」が実施され、2学年にわたる生徒全員に15,000円の補助が与えられ、検定へのハードルが下がった。また、ケンブリッジ英検団体と折衝を度々重ね、厳しい検定レギュレーションをクリアしながら校内受検が実現することとなったことが、実現に向けての大きな一歩となった。

## 6 ケンブリッジ英検の導入

グローバル・スケールで測定する検定にはいくつかの候補があり、校内的にも議論があったが、次の5点が導入の条件であった。

- 1) CEFRに基づいて測定され、内外において信頼性が高いこと。
- 2) 検定料が補助金以内であること。
- 3) 校内受検が可能であること。
- 4) 授業にフィードバックが可能であること。
- 5) 結果を学校（学年全体）で分析できること。

検定団体の協力もあり、この条件をクリアできる検定が「ケンブリッジ英検」であり、検定としても信頼性が高く導入が決定した。

1)については、同検定は、CEFR、ALTE を枠組として開発されており、その成績証明は国際的な有効性を持ち、諸外国での修学、就職等でも広く活用されている。TOEFL や IELTS 等のように国際的な信頼性を持つ検定試験も CEFR との関連性を強調しているように、ケンブリッジ英検はそれをまさに基礎とするものであるため、日本の高校生の英語力を世界基準の指標で考察しようとする時に、CEFR をベースにした同検定は適切なものといえる。

Cambridge English helps you to learn English and prove your English language skills. Preparing for a Cambridge English exam will give you the confidence and skills to communicate with people from all over the world. Over 20,000 organisations accept our certificates worldwide including leading companies, universities and ministries like Deloitte, Volkswagen, McGill University Canada and Immigration New Zealand.

(*Cambridge English Language Assessment Homepage*)

2)、3)については、同団体の協力もありクリアすることができた。4)については諸条件の中でも重視すべき項目であった。学校全体で受ける検定である以上、日々の授業に還元できるものである必要があるからである。その点で、ケンブリッジ英検の特徴として、Speaking のテストが「ペア」ということは大きい。



スピーキング・テストの様子

(「基礎学力総合研究所」ホームページ)

多くの検定試験では、examiner と examinee が 1 対 1 であることがほとんどだが、同検定は examiner と examinee が 2 対 2 である。授業において、生徒に「ペア・ワーク」をさせているが、そういった授業内の活動が同検定の Speaking テストでの評価につながっていくということが、学校の授業内における活動の動機づけになることが期待できる。

5) については、同団体より、学年全体の結果分析を送付していただけることとなり、経年比較も容易になった。

## 6.1 受検種の決定

「ケンブリッジ英検」は、その検定受検者の能力を証明する目的やレベルに合わせていくつかの種類があり、それは CEFR における到達度や能力の目的別によって分類されている。受検種の選択は、生徒の動機づけにつながるため、慎重に選定を行った。

数ある検定種のうち、本校生徒に最も適切なものは何かを決定することにかかなりの時間をかけた。教員間でサンプルの問題を相互に参照し検討した。議論のスタートとして参考にしたのは、文部科学省より平成 27 年 6 月に発表された「生徒の英語力向上推進プラン」における「高等学校卒業段階：英検準 2 級程度～2 級程度以上 (A2～B1) を達成した中高校生の割合 50%」という目標設定である。この目標を参考に、かつ本校の相対的に学力の高い生徒層を考慮した時に、候補として挙げたのが「ケンブリッジ英検 ファースト」いわゆる「FCE」と、「ケンブリッジ英検 プレリミナリー」いわゆる「PET」である。上掲の図表にも示されているように、「FCE」の合格者は B2 に相当し、「PET」の合格者は B1 に相当する。

(*Cambridge English Language Assessment Homepage*)

### FCE

A Cambridge English: First (FCE) qualification proves you have the language skills to live and work independently in an English-speaking country or study on courses taught in English. (ibid.)

### PET

A Cambridge English: Preliminary (PET) qualification shows that you have mastered the basics of English and now have practical language skills for everyday use. (ibid.)

「FCE」はやや高い目標となるが、より高い目標を持たせたいという意味で 2 学年生徒を対象とし、そして 1 学年生徒には「PET」を受検させることに決定した。

## 6.2 検定後の生徒の反応

平成 28 年 12 月、2 学年生徒（実受検者数：298 名）が校内において「ケンブリッジ英検 FCE」を受検した。

受検後の生徒からの反応として代表的なものを以下に示す。

- ・ 実力のなさを痛感した。
- ・ 普段、学校で学ぶこととは違った能力が必要だったので難しかった。
- ・ 「Listening」セクションはスピードが速く難しかった。
- ・ 「Listening」セクションが実用的で良かった。
- ・ 「Reading」セクションの問いが新鮮だった。
- ・ 「Speaking」セクションが楽しかった。
- ・ 「Speaking」セクションでは、とっさに言いたいことが言えなかった。
- ・ 「Writing」セクションは、問いが複雑で書きにくかった。

これまでも四技能を問う検定を受けたことがあった生徒でも、今回の検定試験は難易度を高く感じたようである。

「Listening」セクションについては、いわゆるイギリス英語であり、生徒にとってはあまり馴染みがなかったといえる。また、ナチュラル・スピードであったことも難しく感じた要因であろう。

「Reading」セクションについては、文章の内容それ自体の理解にはあまり苦労しなかったものの、むしろ設問に戸惑いを感じたようである。授業で扱う問題集等では、多くの場合、設問は本文を照応することで解答できる問題であるが、ケンブリッジ英検の設問では、本文を参照すれば自動的に解答が得られるものではなく、段落の概略を答えさせたり、筆者の意見を推測させたりなど、単なる内容理解ではなく論理の一貫性や批判的な視点を問う問題であり、そういった意味では生徒はあまりその種の問題に習熟していなかったと思われる。

「Writing」セクションについては、140～190語という、書き慣れていないボリュームを書くことを求められたことや、トピックがただ単に与えられているのではなく、盛り込む情報が指定されていたり、ある資料について書いたりする条件が加えられていたことで、苦労したようである。

「Speaking」セクションについては、ペアでの受検ということに多少の戸惑いがあったようであるが、授業においてペア・ワーク等には慣れているので想定よりは落ちついて受けられたようである。ただし、やりとりについては思ったほど自分の考えや意見を伝えきれなかったようである。

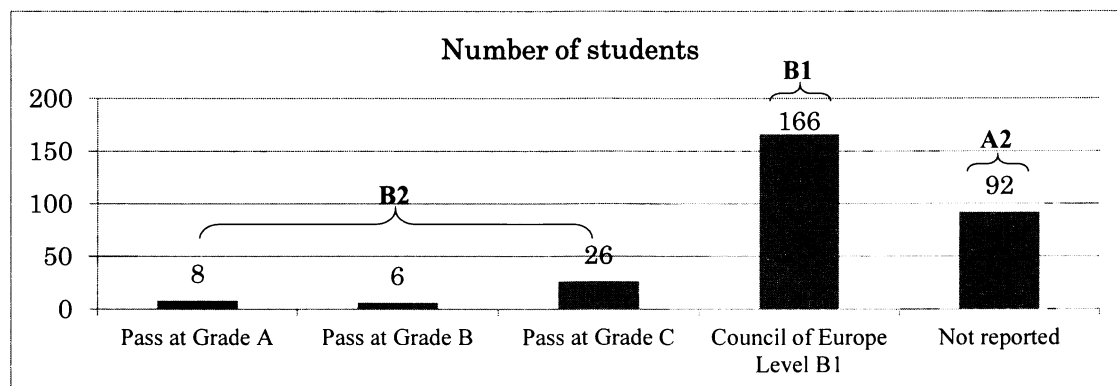
### 6.3 検定の結果

前述のとおり、合格を CEFR の B2 相当とする「ケンブリッジ英検 FCE」は英検準1級に相当すると言われ、2学年生徒に対しては厳しいレベルであることは予想しており、合格者は全体の3%程度でないかとみる向きもあった。しかし、結果的には B2 以上に相当する合格者は全受検者(298名)の13.4%(40名)となり、合格とはならなかったものの B1 相当であるものが55.7%(166名)となった。すなわち B1 以上が全体の69.1%(206



名) で約 7 割を占めることになる。高校 2 年生の 2 学期の段階としては、相対的に高いものとなった。しかし、一方で 3 割の生徒が B1 に達していないという状況も明らかになった。この結果に考慮すべき点があると考えられる。ただし、Not reported に位置する生徒の成績を追跡したところ、一部未受験者等を除いて全員が A2 レベルには達していることが判明した。

Result	CEFR level	Number of students	Percentage
Pass at Grade A	B2	8	2.68%
Pass at Grade B		6	2.01%
Pass at Grade C		26	8.72%
Council of Europe Level B1	B1	166	55.7%
Not reported	A2	92	30.87%



#### 6.4 ケンブリッジ英検結果と大学入試模擬試験結果とのギャップ

高等学校の英語力の定点観測において、いわゆる予備校等が製作した大学入試を想定した模擬試験を用いる問題点については 3 で述べた。これは今回の検定結果との比較においても問題点が明らかになった。ケンブリッジ英検と大学受験向けの模擬試験の相関関係を分析するのは困難であるが、大まかな特徴を比較することは可能である。

ケンブリッジ英検では、学年全体の約 3 割が B1 に届かず、高校生の標準レベルとされる A1~A2 層に存在している。一方で、相対的にレベルの高いといわれている大学入試向けの模擬試験（高校 2 年生 7 月に受験：全国で 34226 名が受験）の結果では、平均点の標準レベルとされる偏差値 50.0 以下を取る生徒は 322 名中 25 名、7.8% と極めて少なく、多くが中上位層に位置している。非常に大まかな比較ではあるが、グローバル・スケールにおける英語力では、少なくない生徒が目標到達までに課題を残すものの、大学入試で求められる英語力では多くの生徒が十分な力を着けているのである。このギャップは、ある意味で日本の英語教育の問題点の一端が見えてくる。ただし、ここで着目したいのはグローバル・スタンダードによる英語力に達しているものは模擬試験でも確実に結果を出して

いるが、その逆は必ずしも真ではないということである。

## 7 まとめ

小学校、中学校のみならず、高等学校におけるさまざまな英語教育改革が CEFR の概念、枠組みを活用して進んでいるのは 1 で述べたとおりである。こういった大きな流れから、CEFR をベースとした検定、「ケンブリッジ英検」を導入することで、高等学校への教育現場で CEFR を活用する一つの事例について述べてきた。

本稿では、特に第 2 学年の生徒が「ケンブリッジ英検 FCE」を受検したケースについて報告した。結果としては、B1 レベル以上の生徒が全体の 7 割を占めており、文部科学省の目指す「高等学校卒業時 B1 レベル 50%以上」を高校 2 年生の 1 2 月時点でクリアしているという点では、一定の評価をすることができるが、一方で約 3 割の生徒がまだ B1 に達していないという状況もある。しかし一方で、大学入試対応の模擬試験では 9 割以上の生徒が標準以上の英語力を身に付けているという結果となり、大きな隔たりがある。

CEFR をベースとした「ケンブリッジ英検」の導入により、生徒も教員もグローバル・スケールでの英語力について自覚するようになったことが大きいと思われる。授業運営においても、教員側は活動的な内容を増やしたり、生徒もこれまで以上に諸活動に対して強い動機を持つようになったりなど、有形無形の形で良い影響が出始めている。今後は CEFR の内容についての深い考察と、授業運営への投影が大きな課題となる。

## 参考文献

- Cambridge English Language Assessment Homepage. <http://www.cambridgeenglish.org>  
基礎学力総合研究所ホームページ. <http://www.21lri.co.jp/faq/>  
文部科学省. (2009). 高等学校学習指導要領.  
文部科学省. (2013). 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf)  
文部科学省. (2016). 「平成 27 年度英語教育改善のための英語力調査事業報告」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2016/12/16/1375533\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/12/16/1375533_1.pdf)  
文部科学省. (2016). 「平成 29 年度大学入学者選抜実施要項」.  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2016/06/14/1282953\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/06/14/1282953_02.pdf)  
教育再生実行会議. (2013). 「これからの大学教育等の在り方について（教育再生実行会議第三次提言）第三次提言」. [http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai3\\_1.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai3_1.pdf)  
特定非営利法人全国検定振興機構. (2016). 「民間の英語資格・検定試験の大学入学者選抜における活用実態に関する調査研究事業調査結果報告書」.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/117/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2016/05/24/1368985\\_5\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/117/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2016/05/24/1368985_5_1.pdf)  
NHK 出版ホームページ. <http://sp.nhk-book.co.jp/text/pdf/cefr.pdf#search=%27nhk+cefr%27>